

異学年で構成する社会福祉ゼミの実践例

小坂 淳子

A Practical Example for the Social Welfare Seminar Comprising Students from Different Grades
Junko Kosaka

要約

本学は、3年目の試みとして、通常の「クラス」¹⁾とは別に、週1回の異学年で構成する社会福祉ゼミを立ち上げた。これは学生に対する適切な基礎教育と卒業論文に結実する専門教育をむすびつけようとするものである。また、学生の自主的な活動を支援し、きめ細かな生活指導を行うことができる少人数教育による効果をねらったものである。このゼミの導入に当たって、ゼミ担当者会議において、指導にかかわる全体の共通目標は確認したが、内容の具体化は個々のゼミで行うこととした。

小論は、介護福祉士が専門職として求められる「共感力」などの情意的な側面にかかわる部分と「調べ・まとめ・伝える」等の知的能力にかかわる部分の獲得をめざしたゼミの実践報告である。

キーワード：異学年 社会福祉ゼミ 介護福祉士 情意面の育成 知的能力

2005年10月24日受理（教育研究）

はじめに

介護福祉士は現在40万人を越え、今後は介護福祉士としての「質」が問われる時代になってきた。わずか2年間という短期の教育期間で、生活レベルでの援助を行うのに必要な基礎的な能力や資質を十分に身につけさせることは至難の技である。

介護福祉士の仕事は、援助を必要とする利用者と家族の生活を支援する専門職である。援助を必要とするに至った原因や経過を把握できることにくわえて、きわめて多様な価値観と個性をもつ対象者への理解とかがわが求められる。したがって、当事者である利用者から学ぶことがとりわけ大切な基本姿勢となる。

援助者からの視点ではなく、利用者の立場にたった視点が求められる。つまり、利用者が「何ができないか」ではなく、相手の立場にたつことで「何ができるのか」

という視点を持つことである。そこから、何を、どのように支援するのか、という計画と技術的な援助が始められるからである。また、「共感力」などの情意的な側面にかかわる部分の育成の重要性については、介護福祉労働では、対象者に対して、生老病死を必定とした喜怒哀楽をもつ「人」としてかかわる必要があるからである。

石田一紀は、介護福祉労働者として、身につけなければならない4つの能力として、次の4点をあげている²⁾。(1)要介護者にたいする観察力と評価能力、(2)生活問題として利用者の障害を社会的に認識していける分析能力、(3)市場原理の元での連携を構築する専門性、(4)共通言語の確立、である。学校教育のなかで、「観察力」や「評価能力」さらに「分析能力」を身につけるための基礎は、何より人間を自己も含め、どのように理解するのか、ということが課題となるの

1) 本学では、30人を1クラスとして2クラス編成をしている。介護福祉士養成に必修科目とされているほとんどの講義は、クラス単位で受講している。

2) 石田一紀「介護福祉労働論」萌文社 2004年 77-78

ではないだろうか。

しかし、このように人にたいする豊かな感性や共感を通した人間理解は、どちらかといえば学業成績の順位が優先される学校教育の中でそぎ落とされてきたものである。また、「連携」や「共通言語」に関しては、生（なま）の人間関係を通した相互のかかわりの中で形成されていくものであると考える。人とかかわらなくても生活に不自由なく日常生活が可能なかで、人との結びつきが稀薄になっている現状が、これらの育成を一層困難なものにしている。

「連携」や「共通言語」は、「異なるもの」を意識化することから始まると言える。現実のクラス編成は、圧倒的に同年齢の若者が占めている。かつて、社会人が若者に対して持っていた一定の影響力というものも少なくなってきたように思える。入学直後からの異学年での共同ゼミを立ち上げることで、「異なるもの」の存在によって気づくこと、また、「連携」や「共通言語」を持つことの意義と困難さが理解できると考える。

このような学生の実情と介護に求められている課題の中で、短期大学創立の3年目を迎えて、学習を受けるクラス単位とは別に、新たな試みとして、異学年で構成する社会福祉ゼミを立ちあげた。これらの社会福祉ゼミは、それぞれの所属する学生にとって、「生活」、「学習」、「就職」等に関する交流、切磋琢磨、相談などを行う領域と位置づけられている。本学では、大学祭や自治会活動などを通じた生（なま）の人間関係を積極的に体験する機会があるが、社会福祉ゼミもその一つの間として位置づけ、新たな試みとして導入がはかられたのである。

1. ねらい

カリキュラム上は、1年生「社会福祉基礎ゼミ」、2年生「社会福祉ゼミ」として位置づけ、合同で異学年のゼミを構成した。これらの社会福祉ゼミの導入にあたって、ゼミ担当者会議で、次の5つの共通目標が確認された（2004年3月4日）。

①1・2年合同という本ゼミの長所を引き出し、かつ作り出すこと（1・2年生相互の“刺激”の与え合い、2年生の指導力を引き出す、1年生は早くから2年間の学習・キャンパスライフを理解でき、計画的な

学生生活を送ることにつながる）

②1年生は、基本的な学力を確実に身につけ、福祉（特に介護福祉）に関する基礎的知識を習得し、卒論作成に必要な知的関心を養う。

③2年生は、自己の研究テーマを深め、まとめる力を養う。調査（文献・DATAなど）・思考・文章表現能力を養い、かつ1年生の時に発見した自分の課題を追究する。

④ゼミ形式の教育に必要な報告・発言・討論能力をゼミ生全員に身につけさせる。グループワークなどさまざまな方法を活用する。

⑤卒延者とその該当者など、困難を持つ学生に対する個別指導を行う。個別の教育プログラムを作成する。

さらに、個別目標として確認された事は、ゼミ担当教員の特性と能力を生かし、教育方法や指導のあり方、あるいはゼミ独自の教育テーマの設定などを個別に行うものとした。

筆者は、担当した社会福祉ゼミを、次の3つの場とする事をねらいとした。

一つ目は、学生の“主体の形成を行う場”とする。福祉を学ぶ学生にとって、知識や技術は、現場で実際に使えてこそ生きる（役に立つ）という性質を持っている。したがって、知識や技術を使い、生かせる“主体の形成”が必要となる。わずか2年間という短期で専門職としての養成を行うなかで、専門職として基礎になる主体形成に重きを置いた。

I部の場合、新入学生は基本的には高校を卒業した年齢である。本校の場合は、介護福祉士養成という職業に直結する方向性をもった場所を選択したという利点があり、目的意識的に入学した学生もいるが、「何となく」、「とりあえず」という入学動機の学生も見られる。中には介護福祉士というのはどのような仕事なのか、よくわからないまま入学している学生もいる。したがって、最初の課題は、介護福祉士としての主体形成の意識的な取組が必要となる。

1年次の実習経験があり、「介護福祉」を学んだ2年生からの影響は大きい。2年生も、後輩に具体的に学生生活を伝えるなかで2年生としての課題が意識出来、1年生は2年間の学びの見通しを持つことができる。

二つ目は、“倫理観を身につける場”とする。

対象者の生活の場で生活を支援し、創造する直接援助をおこなうのが介護福祉士である。相手を尊重する、相手を理解できる、時間を守る、決められた規則を守る、秘密保持ができる、公私の区別がつける等は、厳しく自己規制ができなければならない。例えば、落ちているゴミを見つけたとき、どうしてこんなところにゴミが落ちているのだろう。ゴミの管理はどうすればよいかと考える力と、同時に、目の前にあるゴミを理由の如何にかかわらず拾ってゴミ箱に捨てるという行為ができなければならない。こういう動ける身体は、先輩から「文化」として伝えられることで定着されていく。集団のなかで、このような自律意識を意図的に育てる場とする。

三つ目は、「学びを伝え合う場」とする。完成までの何度かの卒業論文の「発表の場」と「聞き手の場」を設定することで、それぞれの課題を発見させる。卒論作成の最初から1年生にかかわらせることで、完成までのプロセスを理解できる。「最初の頃の内容が、こんな立派な内容に変わっていたのに驚きました。私にも書けるのだろうか」と不安にさせられまし

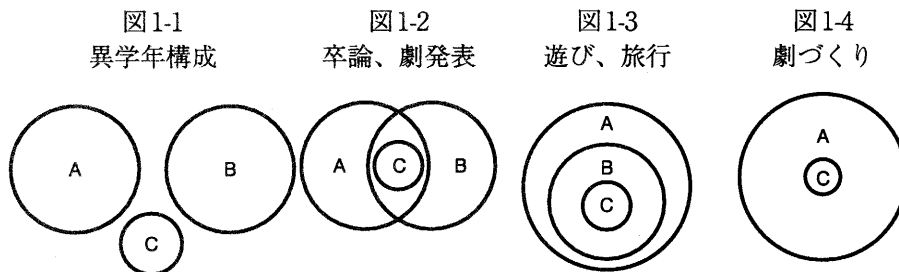
た」等の感想がある。入学直後のゼミで、学校周辺の道路で、2年生が1年生を車いすに乗せる体験を行った。2年生が車いすの操作や運行上の諸注意などを、なぜそうするのかの理由も述べながら後輩に説明している。先輩から伝えてもらって、「よく分かった。次の1年生に教えてもらったように伝えたい」と感想を述べている。このように、技術を伝えることや試験の情報や教員評価まで含めて、学びを伝えあう関係を意図して作る場とする。

2 社会福祉ゼミの実践内容

(1) ゼミ構成

入学直後の1年生については、6人の担当教員（6ゼミ）で平均的な人数になるように配属した。2年生については、事前に卒論内容希望のアンケートを実施し、基本的にはゼミの担当教員の内容に近いテーマ別に配属先を決定した。小坂ゼミは、1年生が11人（女性9人、男性2人）2年生10人（女性6人男性4人）3年生1人（以下、卒延者という）合計22人のメンバー構成である。なお、3年生は留年生であり、卒論は2

図1 社会福祉ゼミにおける異学年構成図



注:Aは1年生、Bは2年生、Cは卒延生

表1 ゼミの1年間の取組み (2004年～2005年)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	集団づくり		学習		夏休み 実習		学習		表現		ゼミ旅行 まとめ	卒業
2年	本読み 遊び		卒論 テーマ発表	実習体験 伝達	第2段階 実習	卒論中間 発表 視写	文献 紹介	第3段階実習		卒論 最終 発表	ゼミ旅行	卒業
1年	本読み 遊び		聞く・学ぶ	第1 段階 実習	読書 課題	視写	文献 紹介	劇づくり		劇発表	ゼミ旅行	進級
新聞「ばおばお」の発行／毎月の誕生日会												

年次に既に終了の学生である。また、2年生のうち、1名は自己都合で後期休学した。

前期の社会福祉ゼミは週1回(15回)開催されたが、後期は、2年生が第3段階実習のため、11月中旬から、1年生とすでに実習を終えている3年生の構成メンバーで、週2回の開催となった(1・3年生は15回、2年生は7回)。

なお、2年次にクラスメンバーの再編成が行われたので、2年生といえども顔見知りであるが、よく知らないというメンバー構成となった。したがって、最初の課題は、2年生の集団をどう作るかであった。

図1は社会福祉ゼミにおける異学年構成図をあらわしたである。Aは1年生、Bは2年生、Cは卒延生で、それぞれ異なる教育課題をもつ集団である。テーマ毎に、それぞれの異なる集団が、異なる事をプラスに作用するプログラム(図1-2、1-3、1-4)を意識して取り組んだ。

(2) 集団づくり

初めてのメンバーの出会いの集団は、図1-1である。4月5月はメンバー同士が知り合い、何でも言える楽しい雰囲気づくりにとりくんだ。2年生も1年次のクラス集団が解体されたため、8名の元クラスに3名の別クラスの構成になった。1年生は、初めて出会うメンバーであるが、同じクラスに所属する集団である。また、留年生が1名参加しており、メンバー間の知り合う関係づくりのため、①集団で遊ぶ。②同じ本を共通で読む(「人権」をキーワードにして、特別養護老人ホームの実践冊子³⁾を2年生が分担して1年生に専門用語や書かれている内容を説明する)。③誕生日会をする。④リーダー(2年)副リーダー(1年)会計2年、ゼミ新聞発行『ばおばお』⁴⁾(中国語で新聞という意味)担当者2名など役割を決めた。

具体的内容を紹介しますと、①「集団で遊ぶ」については、ゼミメンバーを知る目的のために、最も力を入れたところである。遊ぶ内容について意見交換したが、なかなかでてこない。集団であそんだ経験のある時代の遊びを提案すると、すんなり子ども時代に戻れることができたのか、イメージが共有でき、「渦巻きじゃ

んけん」を屋外ですることにした。提案者がリーダーになってルールを説明し、どこで遊ぶか、準備するのは何か、参加する服装はどうするのか、場所を使用するときに手続き等を決めて、翌週のゼミで「遊ぶ」ことにした。

しかし、当日は、グループにわかれたものの、何をどうすればよいのかわからないといった表情でつたっているだけで、ヨコの動きを見て、自分から動こうとしない。決めたことを実行するまでの段取りができない。実際に遊びが開始されるまでに時間がかかる。身体を動かすことが非常におっくうという印象で始めていたが、次第に熱が入り、表情もなごみ、声をあげて、楽しめるようになった。

②本読みについては、4月の段階では、特別養護老人ホーム「喜楽苑」の実践を紹介した小冊子をテキスト(介護現場から『高齢者の人権』を考える)として配布し、2年生が分担を決めて説明をし、質問にも答えるという時間をとった。1)拘束。2)言葉遣い。3)プライバシー。4)自由について。5)個室化についての5つのチームに分けた。1年生は「知らない」事が当たり前なので、素朴な質問をすることができる。わかっているつもりの2年生は、質問されても具体的に答えられない。あらたまて質問されると、わかったつもりの事があやしくなる。伝え方の工夫を考えた。

1年生には、後期がはじまってすぐ70冊の「福祉の文献」のあらすじを紹介し、この中から1冊を選んで感想文の提出課題をだし、新聞「ばおばお」に掲載した。

③誕生日会は、月に一度自分の誕生日に当たる学生が「誕生日を迎えて」で挨拶をしてもらう。2年生は、20歳になった学生がほとんどであったので、「二十歳をむかえた感想」などを述べてもらった。

二十歳になるという事は当人にとっては、何も改まる事ではないが、ゼミの社会人経験のある学生からのメッセージをもらう、18歳の学生からのメッセージをもらう等を通して、「みんなにお祝いしてもらったはじめての経験だ」という学生が多く、繋がる機会に

3) 市川禮子「介護現場から『高齢者の人権』を考える」佛敎大学通信教育部 2001年3月

4) 小坂ゼミ新聞の発行号と発行日は以下の通りである。1号(2004年4月15日)2号(4月28日)3号(5月14日)4号(5月28日)5号・6号(6月9日)7号(6月23日)8号(6月30日)9号(7月7日)10号(7月12日)11号(8月9日)12号(9月2日)13号(9月15日)14号(10月7日)15号(11月8日)16号(11月18日)17号(12月20日)18号(2005年1月6日)19号(2月2日)20号(3月11日)

なった。終わった学生は次の誕生日の担当者として、企画を考えるというルールをつくった。

たまたま、このゼミの構成員は自己主張の控えめな学生が多く、誰でも主役になれる機会として誕生日会やゼミが始まる最初の5分を、「今日のトピックス」と題して順番に発表する機会を設けた。(前期のみ)

④ゼミリーダーは2年生、副リーダーを1年生として、会計や新聞係などの役割を決めた。週のはじめの休憩時間にリーダー会議を15分程度持ち、その週のゼミの内容と進行を確認した。大きなテーマはあらかじめ伝えているが、中身については学生が主体となるように配慮した。

⑤新聞の発行は、以下の通りである⁴⁾。

(3) ゼミ新聞「ばおばお」の発行

どんな新聞の形態にするのかを決め、原稿あつめ、作成、配布等は学生(新聞係)が担当した。新聞には、毎回オリジナルな「木」⁵⁾(気づくようにという意味)を描き、楽しめる新聞づくりを心がけた。新聞作成のねらいは(20号まで発行)①ゼミの会議内容や予定などに関する記録や連絡、相互の確認等である。②お互いの事を深く知り合い、集団の一員としての自覚を持たせることである。③自分の報告したことが他者にどのように受け止められたのかを意識させるため、ゼミでの発表等の意見や感想を掲載する。そのことで、実際の中では発言できない学生の声を届けることや、意見や感想を書くことで、集中力をつけることをねらった。その他、④2年から1年への伝達事項(学生間の)や、⑤実習時期の違いを意識させて、お互いのエール交換を行った。2年生から1年生の実習中に送られたメッセージに励まされて、はじめての実習をがんばって続けられた、という報告もあった。逆に1年生から2年生に送られた内容は、こんな大変な実習を私たちの倍の時間もとりに組む2年生ってすごい、というものが多く見られた。また、福祉に関する書籍の簡単な内容を紹介して、長期の休みごとに読書課題を課したがその感想文なども掲載した⁶⁾。

(4) 視写について

夏休み明けの授業再開と同時にそれぞれの学生の課題がみえてくるようになった。全員に共通して見られ

ることは、文章が書けないということである。そこで、9月にはいって1・2年生とも、たとえば朝日新聞であれば、「天声人語」に相当する部分を毎日視写し、提出させて添削して返却する課題を出した。

なお、新聞は、自宅でとっているものであれば何でも可とした。

このとりくみのねらいは、次の点である。新聞をよく見て原稿用紙に書き写すことで、短時間の集中力をつける。原稿用紙の使い方の約束を守って文が書ける。自分の文字の癖を知る。漢字の読み書きができるようになる、接続詞などの使用方法を学ぶ。社会の動きやトピックスを知る。800字程度の文章を起承転結の構成にしたがって書く力ができる。文の意味を理解しながら、音読でき、黙読できる力をつける。これらを通して、本を読む力を獲得できる。

2年生は、毎日提出させることで、卒論の内容について話すきっかけをつくり、卒論の指導を受けるという関係づくりもねらった。ちなみに、提出は強制ではなく、それぞれの学生の自己判断とした。本当に視写をしてほしい学生から提出されないのが現状だった。

(5) 卒業論文指導

卒業論文指導は、卒業時に全員の論文が掲載された『卒業論文集』を卒業生に手渡している事から分かるように、本学でも重点をおいている教育課題である。2年間の学びの仕上げとしての論文を完成させることは、学生にとっては高い課題でもあるが、調べること、書くこと、伝えることは、どのような専門職でも求め続けられる課題であり、必須要件となるからである。卒業研究の作成については指導を受けるという「やりとり」を重視した。「教えてもらう」ことの姿勢が「学ぶこと」への謙虚さにつながることを期待した。

社会福祉ゼミでは、卒業研究のとりくみは、「テーマ発表」、「中間発表」、「最終発表」と3回実施している。時期はそれぞれ、6月から7月の下旬、夏休みがあけた9月から10月にかけて、最後は冬休みがあけた1月である。

卒業論文テーマ選択には、本人が自覚しているかどうかは別として、学生はそれぞれ自分の持つこだわりを選んでいく。それらは、職業として介護福祉士を選

5) 1号から20号まで発行されたが、次第に木(やる気)を育て、20号の最後には豊かな実りを付けるデザインになっている。

6) それらの一部は、大学の「図書館だより」第5号(2004年9月30日発行)に掲載された。

択し、継続していくための自分自身の課題に結びついていることが多い。決して偶然にテーマが選択されているわけではない。

したがって、個別指導で関係をつくりながらテーマを選ぶまでのやりとりをすることが論文指導の導入として重要となる。このような「やりとり」ができる関係ができることが指導の一步であるが、困難な学生ほど関係づくりがなかなかできない。

卒業前に、全学対象の卒業論文発表会が2日かけて実施される。1日目は1・2年合同による全体会で、各ゼミから選ばれた学生による発表が行われ、2日目はテーマ別の分科会がもたれる。このように、卒業生全員が卒業研究の発表する機会を与えられている。1年生は卒業研究発表会に参加することで、自分の卒論テーマやその分野をイメージする事ができるのである。

しかし、前述のように、1年生は、卒業研究発表会で、はじめてその内容にふれるのではなく、社会福祉ゼミで、2年生の卒業論文テーマ発表という最初の段階から完成までのプロセスを共にすることで、論文作成についての具体的なイメージを持ち、いかなる準備と困難が伴うのかを体験できる。集団は、図1-2の関係である。卒延者には、全体の講評、司会などの役割をってもらうなどして、二つのグループの中心に置くような配慮を行った。

最初の「テーマ発表」は、集団ができ、少しずつ本音でものが言えるようになってくる6月に3回実施した。発表者はあらかじめレジュメを用意し、テーマと選択理由について3名が15分ずつ発表し、45分経過すると3つのグループにわかれてグループ討議する。時間終了後の5分前に再び全体で集まって次回の確認をする。

最初のテーマ発表時における2年生の感想である。

——発表したい事の半分も言えませんでした。発表しながら自分の考えなどを言って、後にはひけなくなりました。(男子学生)

——とにかく、緊張しました。発表をしてみて自分の卒論のとりくみの資料の少なさを実感しました。(女子学生)

——緊張しました。手がプルプルとふるえ、時間が長く感じました。(女子学生)

次は、1年生からの感想である。

——<虐待をテーマに選んだ学生に>自分のマイナス面にそってテーマを選んでいてすごいな、このテーマを乗り越えたらきっと愛情のあるいい介護福祉士になるだろうなと思いました。(女子学生)

——<100歳像をテーマに選んだ学生に>100年生きるって今の自分たちからしたら全然実感ないです。話をきいて、すごいことに挑戦するなと思いました。(女子学生)

このように、全員のテーマ発表が終わると、必要な資料あつめ、本読み、調査表の作成などを短期間の夏休み前にとりかけられるよう指示する。

2回目の「中間発表」では、章立てにそって発表することを課題とする。

3回目の「最終発表」は、完成度にちかいものを発表することを課題とする。

発表の回を重ねて来るにしたがって、聞き手への伝え方についても工夫することを要求した。

その都度、1年生に発表を聞いてもらい、テーマ別に別れて質疑応答の時間をとり、発表の疑問点や感想を新聞『はおぼお』に掲載し、2年生に結果を返していくようにした。

(6) 劇づくり

介護の仕事は、集団で関わる仕事である。それぞれのパートナーシップで働くとき、どのようにメンバーと協力してチームを作って、質の高い利用者の生活援助を提供できるかが課題となる。何かを目的意識的に遂行するときの集団づくりは、構成メンバーの一人ひとりががんばるといのは当然であるが、メンバー間でお互いにメンバーの「得手」と「不得手」の部分を知り合う関係ができなければならない。

つまり、「出来ること」と「出来ないこと」の双方への理解が必要である。育ちあえる関係というのは、「できないこと」を相互に認めあえる関係が必要になる。このような関係づくりの経験は、人格形成や主体形成に有効な方法のひとつになるのではないだろうか。実際に、劇づくりの過程や演技をとりくむことで、これまで見られなかったメンバーのいろいろな姿がでてくる。劇づくりは、2年生が第3段階実習で学校に来ない11月中旬から1年生の集団のみになった時期から始めた。11月18日～12月20日までの週2回10回分のとり組みである。

最初に、絵本『あらしのよるに』全6冊⁷⁾の読み聞かせを行った。『あらしのよるに』のストーリーの概要は次の通りである。

『あらしのよるに』の概要

嵐の夜、ヤギがたどり着いた小屋の中に、オオカミが入ってくる。小屋の中はまっ黒、外は大嵐、心細い思いをしている2匹は何か変だと思うが、言葉を交わすうちに相手を気の合う仲間だと思込む。翌日、「あらしのよるに」を合言葉にして会うことを約束する。ヤギとオオカミは相手がそれとわかるが、昨日の友情は消えず、岩山のてっぺんにピクニックに行く。その途中にオオカミはお弁当を谷底に落としてしまう。オオカミはヤギというご馳走を前に食欲と友情の選択を迫られる。2匹は秘密の友情を育てていくが、やがてそれぞれの仲間に分かることになる。友情のために仲間を裏切った2匹は共に生きるために山の向こうを目指す。

人は自分とは違うものを受け入れることが難しい。弱さが似たもの同士で仲間をつくり、違うものを排除する。『あらしのよるに』で展開される、食欲と友情、仲間と友情など、選択できないが、選ばなければならぬ場合、選択を判断する自分の価値観（倫理観）は、一体何なのか？などを考える材料として、この絵本を教材として選んだ。ねらいは自分自身を知ることへの手助けである。

1冊ずつ読み聞かせてその内容についての感想を交換しあう。

——暗闇のなかで顔も臭いも分からない。もし、分かれば食べられる。次の日、出会って自然と友だちになれるとは思わなかった。すぐ食べられて終わりと思ったが、思いどおりにならないのがおもしろい。本能通りなら我慢ができずに食べてしまう。けど、友情を感じることで心が満たされたのは意外だった。（男子学生）

——オオカミのガブとヤギのメイ。ガブはすごく我慢していると感じました。話が進むにつれて、その考えは大きくなるし、先が気になってきます。あと2冊でどうなるかが気になるので、早く月曜日

になって欲しいです。私は、最期は、ガブがメイを食べてしまうと思います。メイはガブの大好物のヤギの肉を食べるのを我慢しているのを知り、「食べてもいいよ」っていうと思う。（女子学生）

——「あらしのよるに」を読んでもらって、絵本だから子どもが聞いて喜ぶものだとおもっていたが、今でもとても楽しく聞くことができた。ヤギの気持ちも分かってしまうけど、オオカミの気持ちも分かる気がした。全く住む環境が違う2匹の動物が友だちになることがむずかしいというのが分かった。2匹でかばいあうところがすごくよかった。（女子学生）

そして、全6冊の半分である3冊の読み聞かせを終了した後、自分が作者ならどのように展開予想をするのかを発表しあった。もし、自分がオオカミのガブなら…ヤギのメイなら…そうする？自分に身をおいてとらえなおしてもらおう。男子学生はどうしてもオオカミに、女子学生はヤギに感情移入している。

ゼミ参加者全員がそれぞれ想像したストーリー展開を発表することで、お互いの個性や意外性を発見する機会となった。

6冊とも読み聞かせが終了した後、この本の内容で劇づくりをし、隣接する保育園で上演させてもらうことを提案した。劇団名をつける提案もおこない、学生から出されたネーミングを黒板に書いていった。

結局、kosaka teacherの略を意味する“コッティ”の提案者のネーミングが選ばれ、それを劇団名とした。配役、脚本、演出、ナレーター、背景や照明・効果などの役割を一人一つは担うように決めた。保育園で上演させてもらうために学生たちが園との交渉にも行った。対象が幼児であることを意識させた。聞き手の集中時間を考えて、20分程度の上演時間になるように脚本担当が練り直した。脚本ができあがると、全員で本読みを行い、台詞のいいにくさや長さなどの脚本の内容を全員で検討し、大阪弁も入れた方がいい、ナレーションは、もっと簡潔にするほうがいい、などの意見をもとに何度か脚本を訂正してもらった。

冬休みのあと、ホールや体育館で、全員で身体が熱くなるように身体を動かし（ゲーム、スクワット等）、脚本をできるだけ大きな声で読みあい、演技にはいっ

7) きむらゆういち作 あべ弘士絵『あらしのよるに』6巻 講談社、1994年～2002年

た。最初は、台詞も棒読みで、恥ずかしさで役になりきれない。それでも、それぞれの演技を批評しあい、意見を出し合いながら仕上げていった。衣装、背景、効果、ナレーション等全員で取り組み、なんとか形をつくることができた。

保育園での上演が時間の都合で取りやめになり、結局、1月の2年生の合同の最終ゼミにホールで上演した。最後に、1年生全員が作成した2年生全員そして3年生（卒延者）へ色紙を渡し、2年生からは、一人ずつ感想や卒業にあたっての挨拶をしてもらい、ゼミを終えた。

これらの劇づくりのとりくみでの1年生たちの感想では、「最初は演じるのは恥ずかしくていややったけど、やってみておもしろかったな」と感想が述べられている。2年生は、「劇にご招待」というけど、もっといい加減なものかと思っていたら、真剣に準備して取り組んでくれたので感激しましたと述べている。また、この劇の取り組みの過程で、やっと卒延者である3年生が集団の中にはいってこれた。

3 進路・就職指導

介護保険導入に際しての多様な主体の参入は、介護関連産業への多くの求人需要をつくりだし、今後もこれらの状況は持続していくと予想される。これらの動向は、男子学生の入学希望者の増加となってあらわれ、かつてのように、介護分野が女性に特有な職業ではなくなっている。

大学では、進路・就職委員会が設置され、学年全体の取組がなされており、毎年の就職率は100%に達している。ゼミ単位での就職相談の利点は、学生の個々の課題にあった就職指導ができる点にある。精神科医で、大学の就職委員担当を経験した香山リカは、著書『就職がこわい』⁸⁾で、ひとりの学生の就職問題を本気に取り組みもうと思ったなら、その内的・外的なすべての問題を引き受ける覚悟をもたなくてはいけない、と述べている。本学は、介護福祉科のみの短期大学で、入学動機の多くは、介護福祉士の資格取得することを

目当てとしている。

それゆえ、「お年寄りがすき」、「癒される」、「福祉の仕事をしたい」、「親が介護の仕事をしている」、「人と関わる仕事をしたい」等の介護に関係するものや、対人関係の仕事につきたいから等が多いが、中には、「とりあえず選んでみた」学生もいる。

しかし、介護労働に対する社会的評価は、施設介護の場合は、夜勤のある職場であるが、正当に評価されているとは思えない。東京都福祉人材センター調査⁹⁾で福祉職場に働く人たちの意識調査では、今後も「現在の職場で働く」と答えた人は半数弱（45.2%）で、「転・退職を考えている」人が $\frac{1}{2}$ を超えている。

その理由としては、「経済的に苦しく、生活維持が困難」、「仕事や利用者は好きです。ただ、現在の状況があまりにも酷なので、体と心が病気になる前に退職したい」があげられている。平均勤続年数が4年未満という実態は、介護労働者の“使い捨て”がまだまだ実態としてあるのではないだろうか。

作家の青山光二¹⁰⁾は現在92歳で、ご自分もホームヘルプサービスを受けている。その彼が、「ホームヘルパーとともに」の新聞記事¹¹⁾で、ヘルパーに対して、「彼女は夫もいれば、二人の子持ち、まだ三〇代の女性だが、大学もちゃんと出ている。新しいタイプの職業婦人といえよう」と書いている。介護が社会化されて、国家資格としての介護福祉士が生まれたが、社会的には、お手伝いさんや家政婦とどこがちがうのかが疑問視されているし、かつての家庭の仕事としてのアンペイドワークとしての認識から脱しきれていない。

本学は介護福祉士の養成校なので、就職指導の方向性については、教員も学生もわかりやすい学科である。しかし、専門職としての歴史は浅く、まだまだ社会的評価の低い介護労働に、意義と意味を見いだせなくては就職への一歩は踏み出せない。この点、養成校に課せられた10週間の介護福祉実習における体験と事前・事後の実習指導が、仕事への意義と展望を見出すことに大きくかかわっていることは言うまでもない。

8) 香山リカ『就職がこわい』講談社2004年

9) 東京都福祉人材センター『福祉の職場で働く－紹介就職者の就業状況に関する調査報告書』平成17年3月

10) 妻の介護を題材に『吾妹子（わぎもこ）哀し』で2003年の川端康成文学賞を受賞している。

11) 『しんぶん赤旗』2005年10月4日

4 まとめ

筆者のゼミでは、知・情・意を意識して、「学習」や「遊び」を通じて、「聴くこと」、「表現すること」「かかわること」を意図的にとりいれた内容を実施してきた。

これらの実践結果から、異学年による社会福祉ゼミのいくつかのメリットとして、次の点が挙げられるのではないかと考えている。

- ① 上級生と下級生が仲良くなれ、縦の集団が作れ、学生にとって、クラスとは別の居場所となった事である。現在も、卒業後も連絡をとりあうなどのタテの関係が継続している¹²⁾。
- ② 先輩力という力、後輩力という力をプラスのエネルギーに変えることができた。10人ずつの先輩集団、後輩集団の単位で、目立たない、声も小さく存在感の薄い学生—中には緊張感が強く、人前で言葉が出ない、あるいは吃音があるなどの学生も先輩としての役割を求められるなかで、少しずつ変わらざるを得ない状況が出てくる。
- ③ ネットワークの創り方、組織の動かし方のレッスンになった。ただ、1年間でゼミ組織が解体されるので、継続したかわりがない。2年目のゼミでは、1年次から継続した学生が3名いたが、うち1名は2年目も新聞作成を受け持ってくれている。1名は、視写の点検の役割を担ってくれた。
- ④ 継続して新聞「ばおばお」を発行することで、ゼミ構成員としての自覚（認識）と組織を高めることができた。ニュース等の発行は、職場でも求められる能力である。
- ⑤ 視写は、約3ヶ月間ほぼ毎日継続（104回）した学生が1名いた。結果、本をすらすら読めるようになった。読書感想文なども頻繁に課題として出したが、レポートが書けるようになっている。最後の誕生日会で、学生による発案と内容を含めた手作りの表彰状をゼミ生一同の名前で、1位～3位までの対象者に贈った。
- ⑥ 思い出をつくるゼミ旅行をとりくめた（1年6名、2年5名の参加）。時期は2月下旬だったので、1年生は進級旅行、2年生は卒業旅行となった。定期的に仕事は始まっている卒業生もおり、参加

できないのは残念だった。全員参加は、今後の課題となろう。

以上のように、異学年による社会福祉ゼミを、①主体形成の場、②倫理観の育成、③伝え合う場として3つの場とする試みを行ってきた。クラスとは別の居場所をつくり、1年生には専門職としての基礎の部分である「読む」、「書く」、「聴く」、「話す」ための主体の形成を行うことをめざした。2年生には卒論指導をとおして、それぞれ観察や共感のできる「人間理解」さらに、専門職として必要な「連携」や「共通言語」をもてる能力の育成を試みた。これらの実践で、ゼミ導入時に担当者で確認された1・2年合同のゼミの長所を引き出すという課題達成のはじめの一歩、二歩、三歩の歩みが実現できたと考えたい。

クラス集団とは別の、学びの場としての異年齢の学習集団が、卒業後、どのような力となるのかは未知の分野である。勿論、ゼミのみでこれらの課題が充足されるわけではない。大学全体のカリキュラムの中で、未熟であっても各自の介護観の形成と、専門職として働きつづけられる見通しを持たせることである。2年課程であるため、専門職としての核になる感性と学習は切り離されることなく、同時進行で獲得していく必要があるが、それぞれに異なる教育課題のちがいを常に意識してとりくまないと、ばらばらになる危険性も常に含んでおり、異なる集団の力がマイナスに作用することも予測する中での実践が必要となる。

参考文献

- 大村はま／刈谷剛彦・夏子「教えることの復権」ちくま新書 2003年
佐藤俊一「対人援助の臨床福祉学」中央法規 2004年

（こさか じゅんこ 本学教授）

12) 旧1年生から、卒業生（旧2年、卒延者）によびかけ、卒業8ヶ月後のゼミ同窓会がもたれた。卒業生8名と、在学生6名が参加したが、卒延者も参加した。卒延者にとって、異学年の福祉ゼミが、3年目の彼の居場所となっていたことがわかった。